

叢論經濟

第 172 卷 第 4 号

哀 辞

故 平井俊彦名誉教授遺影および略歴

北米東部インディアン研究の到達点と

エンゲルス『起源』（1）……………大 西 広 1

戦間期における東京電気の

技術導入と技術開発……………西 村 成 弘 20

資金調達と設備投資……………郭 麗 虹 43

韓国財閥における

コーポレート・ガバナンス……………權 赫 基 62

金融変数と企業の設備投資との

因果性検定（1）……………玄 錫 元 81

追 憶 文

平井先生のご逝去を悼む……………保 住 敏 彦 93

火曜の朝は……………柿 本 昭 人 100

豪放磊落と繊細さ……………田 中 秀 夫 104

平成15年10月

京 都 大 学 經 済 學 會

京都大学経済学会規則（沿革）

目的及び事業

- 第3条 本会は、経済学・経営学に関する研究・教育の振興と、その成果の普及を図り、京都大学大学院経済学研究科・経済学部的发展に寄与することを目的とする。
- 第4条 本会は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。
1. 機関誌「経済論叢」を発行すること。「経済論叢」は毎月1回発行すること。ただし、臨時特別号を発行することがある。
 2. 「経済学研究叢書」を発行すること。
 3. 学術研究会を開催すること。
 4. 公開講演会を開催すること。
 5. その他本会の目的を達成するために必要な事業。

構 成

- 第5条 本会は、次の会員をもって組織する。
1. 正会員
 - (一) 京都大学大学院経済学研究科教授、助教授、講師、助手及び経済学部出身者。
 - (二) 京都大学大学院経済学研究科学生及び同研究科出身者。
 - (三) 評議員会にてとくに認めたもの。
 2. 学生会員 京都大学経済学部学生。
 3. 賛助会員 本会の事業を賛助するもの。
- 第6条 前条のほか所定の会費を納めて「経済論叢」の配布を受ける個人及び団体は購読会員とする。
- 第7条 特別の場合に限り、前2条に定められた会員以外のものにも会員に準ずる取扱いをすることができる。
- 第8条 会員には、「経済論叢」を配布する。ただし、臨時特別号はこの限りでない。

会 計

- 第10条 会員は、次の会費を納めなければならない。
- | | | | |
|----------|---------------|---------|-------------|
| 1. 正 会 員 | 年 額 10,000円 | 2. 学生会員 | 年 額 10,000円 |
| 3. 賛助会員 | 年 額 10,000円以上 | 4. 購読会員 | 年 額 10,000円 |

— 既 刊 目 次 —

第172巻 第3号

哀 辞

故 出口勇藏名誉教授遺影および略歴

白杉庄一郎のアダム・スミス研究	田 中 秀 夫
金融工学とコーポレートファイナンス（2）	鈴 木 輝 好
「マルクス・モデル」の諸性質と 生産要素としての労働の本性	山 下 裕 歩
組織論における制度学派の理論構造	櫻 田 貴 道
地下水保全税の制度設計（1）	川 勝 健 志

追 憶 文

出口先生と河上肇	杉 原 四 郎
出口勇藏先生を偲んで	岸 田 理
晩年の出口勇藏先生	柴 田 周 二

哀 辞

平成15年6月5日 本学名誉教授平井俊彦先生が逝去されました 享年77歳
先生は 昭和23年京都帝国大学経済学部を卒業後 大学院に進学され
講師 助教授を経て 昭和43年教授に昇任され 社会思想史を担当され
ました

先生は経済学説史と社会思想史の研究に尽力され 多くの業績を世に
送り 後進研究者に指針を与えられました ロックとシャープツベリを
中心とするイングランド啓蒙思想の研究から出発され ルカーチ コル
シュなどの西洋マルクス主義の研究 さらにハーバーマスを中心とする
フランクフルト学派の研究へと進まれた先生は それぞれの分野で開拓
者的な役割を果たされ 著書『ロックにおける人間と社会』『物象化とコ
ミュニケーション』に研究成果の一端が盛り込まれています 先生のロッ
ク研究はロックの経済思想に経済循環の概念を発掘した独創的な研究成
果として今なお顧みられていますし また先生のフランクフルト学派研
究は 物象化と管理社会をみすえたアクチュアルな意義をもっています

先生は経済学史学会の幹事 社会思想史学会の常任幹事・代表幹事
日本イギリス哲学会の理事等を務めて学界に寄与するとともに 日本学
術会議会員 大学基準協会・大学評価研究委員会委員として学術体制・
教育制度の改革にも貢献されました

先生は 二度に亘る経済学部長として また京都大学評議員として 京
都大学の発展に貢献されるとともに 教育においても多くの学生・大学院
生を育成されました 平成元年停年により退官され 京都大学名誉教授の
称号を受けられましたが 退官後も 名古屋外国語大学教授兼附属図書館
長 外国語学部長 国際経営学部長 副学長 学長を歴任され 私学振興
にも寄与されました

京都大学経済学会は 先生の生前における経済学研究と教育に対する
ご貢献に感謝するとともに ここに生前の先生の肖像を掲げて心から哀
悼の意を表します

平成15年10月

京都大学経済学会



故 平井俊彦教授遺影

故 平井俊彦先生 御略歴

1925(大正14)年 6 月	神戸市に生まれる
1948(昭和23)年 3 月	京都大学経済学部卒業
1948(昭和23)年 4 月	京都大学大学院入学
1951(昭和26)年 7 月	京都大学経済学部講師
1957(昭和32)年11月	京都大学経済学部助教授
1963(昭和38)年12月	経済学博士
1968(昭和43)年 7 月	京都大学経済学部教授、社会思想史講座担当
1972(昭和47)年 3 月	ドイツ連邦共和国、イギリス、フランス、ハンガリー、オーストリアへ出張
1974(昭和49)年 7 月	京都大学評議員
1975(昭和50)年 1 月	京都大学経済学部長
1976(昭和51)年 1 月	京都大学評議員
1977(昭和52)年11月	京都大学評議員
1978(昭和53)年 1 月	京都大学経済学部長・大学院経済学研究科長
1978(昭和53)年 1 月	日本学術会議会員
1981(昭和56)年 1 月	日本学術会議会員
1986(昭和61)年 4 月	社会思想史学会代表幹事
1989(平成元)年 3 月	京都大学教授停年退官
1989(平成元)年 4 月	京都大学名誉教授、名古屋外国語大学教授
1991(平成3)年 5 月	名古屋外国語大学副学長、国際経営学部長
2000(平成12)年 4 月	名古屋外国語大学学長
2002(平成14)年 3 月	名古屋外国語大学退職
2003(平成15)年 6 月 5 日	逝去

〈追憶文〉

平井先生のご逝去を悼む

保 住 敏 彦

今年、5 月 5 日に、神戸市立西市民病院の病棟に、平井先生をお見舞いした折、先生は、「自分はやりたい仕事は、やったように思う」といわれ、淡々とした態度であった。以前から、「生きている間は働き、働けなくなれば、無為には生きていたくない」と言っていたことを考えれば、それは死を覚悟し、死にたじろがない姿であった。私は、学生時代以来、40 年にわたる先生との交流を思い起こし、私の個人的な交流だけでなく、先生の学問研究や教育活動について述べ、追悼文としたい。

1. 先生との出会い

私が平井先生を意識したのは、大学の 2 年生の頃、先生の訳されたルカーチの『階級意識論』（未来社，1955 年）や『若きマルクス』（ミネルヴァ書房，1960 年）を読み、学生向けの講演を聴いてからであった。^{*}60 年の日米安保条約改定反対闘争に関わり、マルクス関係の書物を読み漁るなかで、それらの書物に出会った。自分の属していた学部の講義に飽き足らず、他学部の講義をも聴講していた私は、ルカーチの階級意識論や初期マルクスについてもっと勉強したくなり、あつかましくも、先生の学部の演習を聴講したくなった。最初、お会いしたとき、「絶対に休まないなら、入れてやってもよい」と言われたので、とにかく休まずに、出席した。学部での演習は、ルカーチではなく、Overton H. Taylor, “A History of Economic Thought” Mc Graw-Hill, 1960. という、大部な経済学史の書物の講読であった。私はリカードウに関する章を担当した。ゼミ生は少なかったが、優れた報告をする方が多く、大いに刺激を受けた。

2. 大学院時代の思い出

その後、大学院経済学研究科修士課程に進学し、出口勇藏教授と先生の合同ゼミで、5 年間、H. Glockner の編集した、G. W. F. Hegel “System der Philosophie. Erster Teil. Die Logik” (Friedrich Frommann Verlag, 1964) を読んでいただいた。この本が

いわゆる髭文字でかかれていたので、その後、ドイツ社会民主主義を研究し、同党の理論機関誌「Neue Zeit」の論文を読むときに、髭文字が苦にならなかった。

また、この正規の演習と並行して、先生のお宅で、ルカーチ Georg Lukács の「Geschichte und Klassenbewusstsein」(1923)の中の「階級意識論」以外の論文を読んでいた。『物象化とプロレタリアート』『ローザ・ルクセンブルク論』などである。それには、阪上孝氏、竹本信弘氏、田川恒夫氏、久松俊一氏などが参加した。これらは、『ローザとマルクス主義／歴史と階級意識』(G. ルカーチ、平井俊彦訳、ミネルヴァ書房、1965年)として刊行された。後に、海外研修を終え帰国した甲南大学の山口和男氏が参加し、K. Mandelbaum や Brandis の第二帝政期ドイツ社会民主党に関する研究論文を読むようになった。後には、G. Lichtheim, "Marxism" F. A. Praeger, 1961 なども読んだが、その頃にはメンバーも多くなり、今村仁司氏、山辺知紀氏、小林清一氏、八木俊樹氏なども参加した。

3. 大学闘争とその後

1968年に始まる学園闘争は、政府の大学管理法案の国会上程と、それに対する大学と学生の反対運動から始まったが、旧来の大学の学内的な秩序を一変させた。それに先立つ1960年の、日米安保条約改定反対闘争においては、学生と教職員との間に、対立は無く、両者はともに政府に対抗した。しかし、大管法反対闘争においては、教員層と学生層との間に、反対闘争の方法に関して相違があり、両者が対立するにいった。学生は、「帝国主義大学解体」をスローガンに教授と対立するにいった。こうしたなかで、学生と教授との共同体的な親密な関係は失われた。しかし、大学闘争が始まってまもなく、私は半年ばかり前に内定していた、大阪のある私立大学に就職し、京都を離れたので、その後の京都大学内での学園闘争の事情には、疎くなった。

大学の教授が、学生に批判され、つるしあげられて、苦しんでいた反面で、大学によっては、若手の左翼の教員が、大学の古い権威主義的な勢力によって、排除されて行くという現実もあった。たとえば、同世代のH氏は、K大学の助手をしていたが、新左翼の内ゲバに巻き込まれ逮捕されたために、まもなく助手の地位を奪われた。京都大学の竹本助手は、自衛隊の朝霞駐屯地での自衛官刺殺事件を利用したフレーム・アップにより、全国指名手配となり、逃亡期間が長引く中で、大学への無断欠席という理由で、失職させられた。他の有名大学では、逮捕され警察沙汰になりながら、定年まで助手を

続けた例も多かった中で、そのような結果になったのは、残念な事であった。

私も大阪のさる私学に在職中に、労働組合運動に係わったために、理事者ににらまれ、民族派の学生を利用して、排斥運動をおこなわれ、転職せざるを得なくなった。その際、円満退職し、研究者・教育者を続けることができたのは、先生の助言と仲介のおかげだと感謝している。それにしても、弟子たちが、こうした事態に陥った事に対して、平井先生は断腸の思いがあったと思われる。

4. 先生の学問（ロックとイギリス啓蒙研究）

先生の社会思想史研究は、一つの柱が、イギリス啓蒙思想の研究であり、とりわけ、ロックとシャフツベリー卿の思想について系統的に研究された。学位論文『ロックにおける人間と社会』（ミネルヴァ書房、1964年）は、ロックの経済理論にのみ注目するのではなく、かれの人間観をその経験論的認識方法と関連付け論じるとともに、『統治二論』における市民社会形成論に見られる、かれの社会観と関連付けるものであった。そこでは、人間主体のあり方と社会構造とを相即させて捉えるという、いわば、主体・客体の弁証法的な把握がみられる。そうした把握は、マルクスやルカーチの主体・客体の弁証法から学んだものとおもわれる。

商品交換を商品に投じられた労働量から説明するベティの労働価値説を客観的価値論だと評価し、これに対して、人間主体がその労働により共有物としての自然から取り出したものは私有物になるというロックの労働所有権論を主体的価値論だと評価し、両者を対照的なものととらえた。そのように、先生は、他の思想家と対比しながら、ある思想家の個性を捕らえるという、やり方をとられていた。そう説明されると、目から鱗が取れたような気持ちがすることがあった。

とにかく、先生は、それぞれの思想家の同一性を強調する見方に反対で、各思想家の個性・特殊性を捕らえるべきだという立場であった。これは歴史学派の経済思想研究の方法の流れを汲んでいる。また、私は、かなり長期にわたって、ドイツ社会民主党の経済理論家ルドルフ・ヒルファディングを研究してきたが、先生はヒルファディングやカウツキーの客観主義に対するルカーチの批判を指摘された。この点では、若きマルクスやルカーチの主体的マルクス主義を継承する立場に立っていた。

さらに、思想を生き生きとしたダイナミックなものと捉えることを強調し、平板さ、画一性、動きの無さに反発されていた。そうした思想史の見方は、やはり、ヘーゲル、

マルクス、ルカーチから学ばれた弁証法的把握に、由来するものと思われる。

5. 先生の学問（ルカーチからハーバーマスへ）

先生は、出口先生のもとでは、アリストテレスの『アニマ論』やデイルタイの論文を読んだが、同時に、出口先生が病気で休み、立命館大学教授の梯明秀先生が代講された時期に、梯さんからヘーゲル『論理学』とマルクス『資本論』とを学んだ。梯さんの思弁力を賞賛されるのを、何度か聞いたことがある。私も以前に、梯さんの贅咳に接することがあったので、その発言は特に記憶に残っている。

先生がどのような経緯でルカーチに注目し、『若きマルクス』や『歴史と階級意識』を邦訳しようと決意するにいったかは、何わなかった。しかし、1956年の挫折したハンガリー革命におけるルカーチの行動と運命に、強い印象を受けたためだという事は、明らかである。スターリン主義を初めて大衆的レベルで批判した、このハンガリー動乱にあって、そのソ連社会主義批判をイデオロギー的に代弁していたルカーチは、わが国の多くの知識人にも深い感銘を与えた。先生の訳書は、当時の多くの学生の愛読書となった。

戦後日本のマルクス主義は、『資本論』研究と日本資本主義の現状分析が中心であった中で、当時、梯明秀氏や梅本克己氏の主体的唯物論が、マルクス主義の哲学的展開として、注目されていた。また、1950年代に繰り広げられた、吉本隆明氏をはじめ多くの文学者による戦争責任と転向問題をめぐる論争や、1959年から60年にかけての日米安全保障条約改定をめぐる反政府運動の高揚は、そうした主体的マルクス主義の流布する背景であった。こうした時代状況の中で、先生はルカーチからコルシュへと、主体的マルクス主義の系譜に立つ、1920年代の西欧マルクス主義の研究を続けられた。

しかし、1972年から1973年にかけて、1年間、フランクフルト大学のフェッチャー教授の下で、在外研修を行われた頃から、先生はフランクフルト学派の理論家たちに対する関心を強められた。当初は、ルカーチと比較しながら、ホルクハイマーやアドルノ等のフランクフルト学派第一世代の思想の特徴を探っていたが、後には、ハーバーマスなどの新しい世代に関心を寄せるにいった。この間の先生の研究の進展を、『物象化とコミュニケーション』（名古屋外国語大学、1993年）に収められた論文に即して、追思惟してみよう。

フランクフルト学派第一世代のアドルノは、初期ルカーチの物象化論を継承した。しかし、ルカーチが物象化論と労働疎外論とを結びつけて、労働の疎外を解決する社会主義により物象化を克服できると見たのに対して、アドルノは労働がいつも支配者の強制

の下にあると見なし、労働の疎外からの回復による物象化の解決は不可能と見る。かれによると、啓蒙的理性は産業主義をもたらし、数量、機械、組織といった形をとって物象化し、人間を支配するので、物象化した社会制度による人間支配からの脱出は困難とみえる。この対立に対して、平井先生は「批判的理性は」「労働の弁証法を離れることはできないのではないか」と、ルカーチの側に立つ。

また、先生は、ルカーチの1920年代の西欧マルクス主義とホルクハイマーの反ファシズムを比較した。ホルクハイマーによると、市民社会成立期には個人が自由な活動をしたが、商品生産体制が市民社会に浸透するとともに、商品生産社会がその自然必然性にしたがって個人を強制するようになる。社会が主体になり、個人は客体となる。ホルクハイマーもまた商品経済の発展による物象化現象とその帰結に注目している。

しかし、この分裂した現代社会の問題性を克服する道に関しては、ルカーチとホルクハイマーとは対照的である。ルカーチは、「歴史変革と歴史認識を結合す主体として」の「階級意識」のなかに、商品生産社会の物象化とその結果を克服する主体を見るのに対して、ホルクハイマーは、批判的知性の担い手は階級や集団ではなく個人、それも「自ら分裂性にさらされている知識人」であると、見なす。この対立に関して、先生はサルトルを援用しつつ、「知識人と階級意識との共感」を強調する。

このようにアドルノやホルクハイマーをルカーチと比較した際には、物象化された商品生産社会の問題を解決する方法として、ルカーチの側に立ち、階級意識とそれに共感する知識人を擁護したが、戦後世代のハーバーマスの批判的社会理論を研究するとともに、先生の見解も微妙に変化してくる。そして、遂には、新しい見解を取るにいたる。

先生がハーバーマス社会理論から取り出しものは、何だったのだろうか。それは、社会システムに対する生活世界の対立であり、後者におけるコミュニケーション的行為の果たす役割である。

近代的理性は、自然と対決し生産力を増大させ、人間生活を豊かにしたが、同時に、自然と人間の自然を破壊した。そこから非合理主義も発生してくる。この合理性の非合理性への転化の論理は、理性の道具的理性への転化、産業主義による人間の操作、人間の内なる自然の破壊の三点によって捉えられるという。そして、こうした社会システムの非合理性は、後期資本主義の下で、とりわけ顕著になってくる。

後期資本主義（組織資本主義・現代資本主義ともいわれている）のもとでは、経済から国家が独立化し、むしろ国家が経済に介入するようになる。国家は、社会資本の充実

を図るとともに、「科学・技術の研究開発と教育制度の国家的組織化」を行う。また、賃金は、労働市場の事情により市場の論理で決まるのではなく、「政治的力関係」によって決まる。さらに、国家は、「社会システム間の相互作用の合理的メカニズムの修正」に留まらず、生活世界をも侵害し、生活世界の植民地化をもたらす。

このような後期資本主義におけるシステム統合の進展による社会統合の侵害に対して、批判的理性はどのように対処すればよいのか。

システム合理性に対抗するコミュニケーション的合理性は、「貨幣と権力との媒体によらず、討議によって共同の利害を探究し、相互了解を志向する合理的理性」（平井、前掲書、1993年、212ページ）である。こうして、システム合理性が、社会システムの物象化を押しすすめ、市民社会の公共性を歪めてゆくのにに対して、コミュニケーション的合理性によって、市民の公共性を取り戻すことが、批判的理性の課題となる。ティーチ・インのような直接的な対話、市民的レベルでの様々のメディアなどによって行われる、市民のコミュニケーションの中に、システム統合に対抗する社会統合（生活世界と市民的公共性）の回復の可能性が、求められた。

ハーバーマスの批判的社会理論を受容することによって、先生はルカーチのように物象化をプロレタリアートの階級意識によって克服するという立場を脱したと言える。こうした立場の変化は、1968年の大学闘争や、1972年のドイツ体験を契機としてなされた。

京都大学の退官記念講義「批判的社会理論を求めて」のなかでは、ハーバーマスの批判的社会理論は、「コミュニケーション的行為モデルを設定し、社会システム内部における貨幣や権力によって人間の相互行為がいかに歪められるか、つまり既存の組織体では戦略的・道具的理性が圧倒的に支配し、人間の結合関係が歪められることを告発し、これに対抗して強制なき討論による合意形成が形成される場」（平井、前掲書、1993年、251ページ）を提示したと評価している。そして、この場を、実質民主主義の場と捉え返し、それを啓蒙主義のロックやシャフツベリーの思想のなかに、捉えなおすという課題を提起している。ドイツ社会理論の研究とイギリス啓蒙思想の研究が、この点で接合されている。

6. 教育者としての先生

先生は、以上のように、自己のテーマを一貫して追及される研究者であったが、同時に、優れた教育者であったことを評価しないわけにはゆかない。経済学部にあってもマイナーな科目である社会思想史の講座に、多くの大学院生が集まったのは、先生の学問研究が時

代の要請にマッチした、アクチュアルなものであったことによる。先生の大学院ゼミには、経済学部卒の卒業生だけでなく、他学部あるいは他大学から来た学生がいた。文学部や理学部からは、とりわけ、おおくの学生が移ってきた。そこから、多くの研究者が育っていった。

先生の指導は、各学生の持つ個性とテーマを尊重し、その能力を引き出すことを目指す、自由主義的なものであった。決して、テーマを押し付けることはしなかった。社会思想史の研究に関しては、マルクスであれ、だれであれ、ある権威者の思想から、各研究対象の思想を断罪するという、いわゆる検察官タイプの研究方法ではなく、研究対象の思想の個性・特徴を捉え、その理論的あるいは歴史的意義を発見するような、いわゆる弁護士タイプの研究方法を取るべきだと考えていた。

「対象に惚れ込んで研究すべきだ」ということを、強調されていた。弟子たちに対して、ある鋳型に入れて矯正するといったやり方は、取らなかった。このため、学派のようなものは形成されなかったが、社会思想史、経済学史を始め多くの分野で、多様な研究者を養成された。もっとも、京都大学には、人文科学研究所、経済研究所、旧教養部などに、社会思想・経済学史の関連科目を担当される教官がいたことも、多様な研究者を育てる背景だった。

私自身は、大学院時代に始めた、ドイツ社会主義とヒルファディング経済思想の研究を、『ヒルファディングの経済理論』（梓出版社、1984年）、『社会主義の源流』（世界書院、1992年）など三冊の研究書にまとめた後、1996年以来、ブレーメン大学世界経済国際経営研究所と愛知大学経済学研究科との共同研究により、アジア経済危機とその後社会の制度革新について研究し、英文報告論文集を刊行してきた。しかし、今後は、さらに、永年、研究会を重ねてきた中部ドイツ史研究会の仲間と、ドイツの社会国家の歴史とそれをめぐる論争史を研究し、そこでの経験が日本およびアジアの社会保障や国家のあり方にとって、どのような意味を持っているか、検討したい。その中で、先生のハーバーマス社会理論研究の成果を受け止め、そうした形で、先生の学恩に報いたいと念じている。

最後に、先生は、京都大学において学部長や評議員を勤め、退官後は、名古屋外国語大学に勤務し、図書館長、副学長、学長を歴任し、国際経営学部と国際コミュニケーション研究科を設立された。行政的な手腕も持ち合わされていたと言える。しかし、晩年、お会いしたとき、「教師は、教育する気持ちがなくなったら、辞めるべきだ」と言っておられたことを考えると、単なる学内行政好きのために、行政に携わったのではなかったといえるだろう。

火曜の朝は ——名古屋外国語大学時代の平井俊彦先生——

柿 本 昭 人

「さやか君はいてるか？」火曜日の朝は、平井先生が学長になられるまで、ほぼ毎週こうして始まりました。『社会の実存と存在——汝を傷つけた槍だけが汝の傷を癒す』（世界思想社，1998年）の「序にかえて」にも、こういうくだりがあります。

筆者たちの共通の師である平井俊彦先生には、われわれの研究会にたびたび「介入」して頂いた。研究会が始まった頃、柿本は「貨幣論」を、嶋守は「免疫理論と社会システム」に取り組もうとしていた。本書の掲げた問題が最初からあったわけではない。平井先生の「介入」によって問題意識がクロスする瞬間がもたらされ、「社会の実存と存在」というテーマが出てきたのである。（13ページ）

平井先生の「介入」とは、実は小生の入れたコーヒーを先生が飲まれながら、研究室で色々お話しされていくということだったのです。事務室から出されるコーヒーがインスタントであったことが、どうもお気に召さなかったようで、小生の研究室に来られると必ずコーヒーをご所望になりました。何しろ小生の研究室は、先生の学部長室の目の前に配置されましたから。先生が学部長室にご不在だと、「平井先生はこちらに……」と事務の方がドアをノックされるということもたびたびでした。

1995年1月17日も、きっとそんな日になるはずでした。ところがその日の朝、阪神・淡路大震災が起きてしまいました。ちょうどのその時刻、小生は名神高速道路米原ジャンクションあたりを走行中でした。車が揺れましたが、あたりはまだ真っ暗ですから、「今日は風が強いな。関ヶ原はまだ雪か。除雪作業による50キロ規制で、到着遅れるなあ。」と呑気に走っておりました。制限速度の標示が、一つ、二つ、三つ、ずっと50キロでした。ところが一向に雪は降ってきません。関ヶ原も通り過ぎて、一宮あたりまでやってきましたが、雪も降ってなければ、除雪作業もありませんでした。不思議に思い、流していたCDをラジオに切り替えました。「神戸で地震が起きた模様です……」「そうなんだあ。地震だったんだあ。」その時も、まだ神戸がどうなってるとも、長田

のあたりがどうなってるとも、思い浮かぶこともなかったのです。

宿舎について、片づけや着替えをして、大学に向かいました。ただ何となく落ち着かなくて、大学に着くと事務室のテレビをつけてもらいました。そこに映し出されたのは、炎と煙に包まれた長田でした。「9・11」とは違って、神戸の街が炎と煙に包まれている光景など、小生にとっては『ウルトラセブン』以来であったからでしょうか。小生の口から漏れたのは、「あかんわ」という言葉でした。

平井先生は退官後、京都から神戸に戻られる時、「柿本君なあ、僕は今度パナホームでなあ、鉄骨の頑丈な家建てたんやあ。」とよく聞かされてはいましたが、「今度ばかりは……」と正直言って観念していました。事務室からすぐに電話しましたが、つながるはずもありません。授業の時間も迫ってきます。仕方なく嶋守さんに電話して頼むことにしました。「神戸が地震で、画面は長田ばかり映ってるんだけど、平井先生のおうち、そっちの方なんだよ。悪いけれど、とにかくテレビ見ててくれる。もし何か分かったら、大学の方に連絡くれる。」その日は結局、何も分からないままでした。何度電話してみても、つながりません。公衆電話からも掛けてみましたが、やはり結果は同じでした。

そうして、二日目も三日目も過ぎていきました。夜も枕元にラジオを置いて、安否の伝言を伝える放送をずっと聞いていましたが、「平井俊彦」の名はついぞ聞くことができませんでした。居ても立ってもいられず、神戸に行こうと考えるのですが、行ってもしご無事だったら平井先生からきっとこんな風に叱られるだろうな、とも思うのでした。「柿本君なあ、君、こんなんは具合悪いでえ。君もまだ授業とテストあるやろう。君は名古屋にいて、僕の分のテストとか採点とかしてくれへんと具合悪いと思わへんかったんかあ！」

四日目、その前日に同じ学部の同僚の先生が公衆電話から掛けたら通じたということで、先生の無事が確認されました。大学から「救援隊」を出すということになり、小生もメンバーに加えて頂いて、さあ出発という段になって問題が起きました。平井先生が「大丈夫だから、心配ご無用。家の方も少しひびが入った程度で、給水所に行くのが少し大変なぐらいだから」ということで、固辞されているという連絡が研究室に入りました。小生から頼んで欲しいということで、入試広報室に向かいました。これは多分、公になると問題かもしれませんが、大学入試センター用の回線を使つての通話でした。周りを大学や法人の主だった方々に取り巻かれている中でお話しすることになって、少々

緊張しました。が、電話からはいつもの平井先生の声が聞こえました。「あー、柿本君か。あのなあ、俺は大丈夫やから、大げさなことせんでええって、みんなに言うてくれるか。」「先生、もう出発するところですよ。」「君なあ、いつもの神戸とはわけが違うんやぞ。道路かて瓦礫の山やし、電信柱かてとんとん倒れてくるんやぞ。君はなあ、これからまだせなあかん仕事あるやろ。そんな人間に来てもらって、途中で怪我とか、死んでもろても、僕はよう責任とれへんやないか。」「そんな状況だからこそ、行かせてください。お願いします。」「あかんで言うてるやろ。聞けへんのなら、もう縁切るからなあ。他の人にも、そう伝えといてくれるか。」「もう、聞いてはりますよ。もう一回お願いします。あきませんか。」「そんなことよりなあ、試験と採点頼むからなあ。もう電話切るでえ。」予想通りだったせいもあって、人目も憚らず泣いてしまいました。

ところが、一年も経たないうちに、今度は小生が平井先生に試験と採点までして頂くことになってしまいました。その年の師走のことです。小生が車にはねられて入院してしまいました。粉碎骨折による出血が止まらないために、膝にボルトを通して錘でもって左足が引っ張られたままのところに、平井先生がお見舞いに来てくださいました。「後のことは心配しないで良いから、ゆっくり治すように」と声を掛けて頂きましたが、震災の折に神戸に行けなかったせいで、余計に涙が止まりませんでした。

先生も外大を退職されるまでに二度ほど手術されましたが、その度に「見舞いは要らん。それより帰ってきたら、コーヒー入れてくれて、ケーキ食べさせてくれるか」と平井先生は仰りました。もちろん、手術の日程はできるだけ大学に負担が掛らないよう、休暇中に手術と退院ができるように調整なさっていました。具合が悪いのを押して、我慢なさっていたのだと思います。

平井先生に最後にお目に掛ることができたのは、2003年の4月の初めのことでした。3月から体調を崩されて、ご自宅で療養されているという話を伺い、お電話してみました。「お見舞いにお伺いしたいのですが……」と切り出しましたが、今回もまた、というか今までになく強い口調でこう仰いました。「柿本君なあ、俺ももう最期なんや。手術してもようならんのや。俺はもうやるべきことは全部やったから、後は残りの時間を家族とゆっくり、静かに過ごしたいんや。会いに来て欲しいとは思うんやけれど、見舞いに来てくれてもようならんしなあ。そやし、見舞いは要らんぞ。」「どうしてもお見舞いに行つては駄目ですか?」「見舞いはええわ。そのかわり、平井先生は、おもしろいオッサンやったと時々思い出してくれるか。ほなあ。」「3月末、嶋守さんの結婚式

で平井先生がスピーチをされるはずでした。その後のご様子を彼女が知らないと思って電話してみました。「柿本先生、何言ってるんですか。来るなと言われても、押しかけないと駄目じゃないですか。私はいつでも遊びにおいでと先生から言われましたから、私に付いてきたということで、一緒に行きましょう。」彼女は岐阜の勤務先から駆けつけてくれました。ご自宅に伺っても、彼女は「先生、お見舞いに来たよ。」とスイスイと入っていきましたが、小生は玄関から中に入ることができませんでした。「柿本君も上がれやあ。」と客間から平井先生に声を掛けて頂いて、ようやくお邪魔させて頂きました。久しぶりにお目に掛った先生は、やはり健康がすぐれないのだと一日で分かりました。小生はほとんど口を開くこともできませんでした。お暇しようという時に、先生がこう仰いました。「俺はもうやることは全部やった。君はこれからまだまだ、せなあかんことがある。これからは、人を育てなあ。」言葉が見つかりません。「はい」と頷くので精一杯でした。「自分にとって面白いことをとことんやらなあ。ワッハッハハ。」大学院に入る時に先生から出された宿題でした。「それもまだ、できてませんよ、先生。」

火曜日の朝、研究室でコーヒーを入れようとする、今でもノックの音がしたような気がします。ひょっこり先生がドアの間から顔を覗かされるのでは、と期待してしまいます。「介入」の頃の懐かしさが、消えることは決してありません。先生、小生へのもう一つの宿題のことは、今しばらく忘れたままにさせておいてください。「ワッハッハハ」という先生の笑い声が一番好きでしたから。

豪放磊落と繊細さ

——平井先生の魅力——

田 中 秀 夫

平井先生に最後にお目にかかったのは、一昨年の「田中真晴先生を偲ぶ会」のときだったと思う。そして最後にお電話をいただいたのは、出口勇蔵先生の訃報を知らせていただいた4月5日の夕方のことだった。その翌日にわたしの最も新しい論文「市民社会と徳」の抜き刷りを先生にお送りしたのが、先生とのやりとりの最後となってしまった。

先生はお電話で、腹部大動脈瘤があるのだが、手術ができるかどうかわからない難しい場所である、神戸市民病院へ行くことになっている、といったことを話され、そして「医者に見放されてるのや」と、深刻なことを朗らかな声で言っておられた。その後入院されることなども当然予想できたのに、元気そうな声から判断して、先生はまだ大丈夫だと思い込んでいたから、迂闊だった。

先生との出会い

先生に初めてお目にかかったのは、昭和48（1973）年4月の大学院ゼミの初日であったと思う。すでに30年余りが経つから、そのときのことが記憶に無いのも無理からぬこととは言え、おそらく、指導教官になっていただいた田中真晴先生のゼミで同期となった高橋恩くんと一緒に先生の研究室を訪ねたのではなかったかと思う。大学院では1年先輩になる柴田周二、梅澤直樹両氏が参加されていたと思う。先生はドイツ留学から帰られた直後だった。しばらくはよく留学話を伺った。下宿で出る食事が毎日ジャガイモとソーセージだったという話はよく覚えている。やがて学内でゼミが開けなくなり、先生宅の座敷で胡坐になってヘーゲルを読んだ。

翌年の春には予想を超えた形で田中先生が辞職された。わたしは平井先生に指導教官をお願いし、本格的に英国社会思想史に取り組むことになった。フランクフルト学派研究を選ぶことも可能だったが、わたしは研究が盛んになっていたホップズをやることにした。学部の嵐はまだ去っていなかった。先生はやがて学部長に就任され、多忙な日々

を迎えられた。

こうして平井先生と師弟関係が深まっていくのであるが、ゼミにはほとんど欠席せずに出たと思うし、いまどきの院生とちがって無断欠席などはしたことがない。甲南大学へ就職してからも時折参加したように思う。ゼミでは前述のようにヘーゲルの『法哲学』を原書で読むことから始まって、ピーター・ゲイの『啓蒙』の翻訳の無い巻、マックス・ウェーバーの『経済と社会』の翻訳による輪読へと進んだ。

平井ゼミの人びと

平井ゼミを通じて親しくなった人に小林清一さんや奥田隆男くんがいたが、小林さんとは河野健二先生のゼミでも2年間お世話になった。ここではアルチュセールの『マルクスのために』からアンサールの『ブルードンとアナーキズム』へと進んだ。わたしのフランス語はまるで上達しなかった。その後、木崎喜代治先生が平井先生の助教授として専修大学から移ってこられた。わたしは木崎先生の『フランス政治経済学の生成』を田中真晴先生からもらって読んでいた。木崎ゼミはモンテスキューの『法の精神』を読むことから始まったが、ここでもフランス語に身を入れなかったので上達しなかった。ここでわたしは北村裕明くんや石井三記くんと懇親を深めた。

平井先生が議論の好きな頑強な哲学者だとしたら、木崎先生はサロンを愛する優しい紳士であった。平井先生は「内田義彦さんはデンカーだ」としばしば称賛されていたが、先生自身がデンカーたらんとしておられたのである。そのようなデンカーを慕って学生が次第に集まってきた。先生の思想的な寛容さが魅力だった。言い換えれば、平井先生は学生が好きだった。わたしが就職した頃から、大学院ゼミも賑やかになった。先生はまた博士編入の院生も積極的に受け入れられた。

先生は学位審査にも力を注がれていた。後輩の山口和男さんの学位論文を審査されていた時の先生の姿が目に浮かぶ。山口さんの研究——ドイツ社会主義思想の研究——のメリットと疑問点について先生は熱心に論じられた。山口華楊画伯の次男であった山口さんが経済学者となられたのは時代の影響であろう。山口さんは、出口勇蔵門下において平井先生の2年後輩であった。出口門下は行澤健三さん、田中真晴、平井俊彦両先生、そして山口和男さんに始まる。柴田周二、梅澤直樹さんにいたるまで、幅広い多くの研究者を輩出した出口門下の経済共同研究会にわたしも一度だけ参加したことがあるが、そこでの山口さんは出口先生のお気に入りとして研究会の中心といった印象であって、

甲南での穏やかな山口さんと違っていた。平井先生もいささか緊張された様子であった。

学会と研究

平井先生のお誘いで、わたしは社会思想史学会と日本イギリス哲学会にほとんど創立時から参加した。その縁もあって、楽友会館で開かれた二つの全国大会のお手伝いをした。社会思想史学会では先生は代表幹事を努められた。

東洋経済の『経済学辞典』や『社会思想史研究』に執筆の機会をもらったのも先生のおかげである。僭越にも前者には木崎先生と共同で「社会契約説」について大項目の解説を書かせていただいた。今思うと、冷や汗ものである。

修士論文で取り組んだホッブズ研究を基礎にして初めて公表したホッブズの初期論説についての小論に関しては、先生から直接の指導——ホッブズからの引用の原文に即しての検討——をしていただいた。これを神戸商大で開かれた経済学史学会の関西部会で報告するのが、わたしの学会のデビューだった。ホッブズ研究者、水田洋先生の予想される質問に備えて理論武装して出かけたが、水田先生は欠席され、菱山泉先生からマキャヴェッリとホッブズの関係について鋭い質問を受けた。

その後、先生と一緒に仕事をさせていただくのは学会活動が主であった（わたしは先生が理事を続けられた日本イギリス哲学会の関西部会の幹事を院生時代から10年ほど担った）し、学会活動を通じて多数の研究者と知り合う機会を得てきた。研究テーマをスコットランド啓蒙に絞っていたわたしは、ハーバーマスにますます傾倒されていく先生の研究上の討論者にはなれず、もっぱら聞き役であった。甲南に就職してからは電話で話すことが多かった。よく電話をもらった。先生を中心とする共同研究としては『社会思想史を学ぶ人のために』と『再構築する近代』という先生の編著がある。前者は先生が強いリーダーシップを発揮された編著である。後者は京大出版会におられた八木俊樹さんがサポートされて、研究会を何度か行って出来た論集であって、保住敏彦さんと山中浩司くんが八木さんと共に先生をよく支援された。

京大時代の先生にとって、弟子の職探しはいつも念頭を離れなかったものと思われる。わたしも今ではそのような立場になっており、先生の苦勞が偲ばれる。わたしは、院生に対して、基本的に、よい仕事をして、競争に勝ち抜いて欲しいといつも言っている。D2の時だったと思うが、内田譲吉氏から河野先生を通して、名古屋方面のある私学の経済学史に就職話があって、平井先生から「いかか」と聞かれた。当時、学史・思想史

の就職はきわめて困難で、先輩も必ずしも恵まれない就職口で我慢しているという現実があった。さっそく奈良県立短大に内田学長を訪ねた。「ここには栗本慎一郎くんがいたことがある」という話で、最初は研究条件の悪い大学からスタートしても、業績をあげれば条件のよいところに移れるという話であった。採用側の理事長にも会い、専任講師としての採用が内定した。急いでヒュームについて論文を書いて資格を満たそうとした。しかし、何の理由の説明も無く、1年後に1年の採用延期となった。いわば青田買いで縛っておいて採用延期とは、まったく不誠実に思われた。これには平井先生も立腹された。この話は即座に断ることになった。

平井先生の教訓

先生は弁証法が好きだった。研究の思想的モチーフとしては管理社会からの自由を求められた。マルクス、ウェーバー、ルカーチ、コルシュとハーバーマスを通して、先生は自由人の楽園——自由な生活世界——を夢見ておられたように思う。先生はロック、シャーフツベリ、マンデヴィルなどの研究もされた。イギリス経験論とフランクフルト学派の物象化論が先生のなかでどのような関係に置かれているのか、尋ねる機会を失ってしまった。けれども、啓蒙とポスト・モダンの関係は、今では、かつて以上に、わたし自身の問題として意識するようになってきている。

先生の雄渾な思想像に相应しく、豪放磊落に見える先生である——それゆえに「出口先生から次に破門されるのは俺や」と先生はよく言っておられた——が、実際の先生は、時に細かな配慮もされており、適切な指導をしばしばいただいた。科研費で先生が購入された図書をわたしはしばしば利用している。

先生からは、いろいろなことを教わった。先生の自由放任はありがたかったが、しかし、先生の教えて最も貴重に思っているのは次の言葉である。「田中くん、大きいことを考えてもあかん。論文にはオリジナルな点が一つあればよいのや。」

平井先生のこの教えは水田先生の「思いつき」を大切にせよとの教えに通じるところがある。小林昇先生の言葉「普通に勉強すると、年に2本の論文ができます。そうすると5年で1冊の本ができます。25年で5冊になります……」と「世に公告論文が多すぎる」という田中先生の寡作の勧めは一見矛盾するかに見える。わたしは、デンカーというよりヒストリアンであるという自覚のもとにスコットランド啓蒙を追いかけて、共和主義に関心を深めてきた。いまわたしはこの両者を総合する弁証法を目指さなければなら

ないと思っているのだが、果たしてどうなるか覚束ない。そう述べても平井先生は、朗らかに、ゆるしてくださるだろう。そのような人柄の先生に限りない魅力を感じていたように思う。

(平成15年8月18日記す)

執 筆 者 紹 介 (掲載順)

大	西	広	京都大学大学院経済学研究科教授
西	村	成 弘	京都大学大学院経済学研究科学生
郭	麗	虹	京都大学大学院経済学研究科学生
權	赫	基	淑明女子大学校日本学科助教授
玄	錫	元	京都大学大学院経済学研究科学生
保	住	敏 彦	愛知大学経済学部教授
柿	本	昭 人	同志社大学政策学部設置準備室教授
田	中	秀 夫	京都大学大学院経済学研究科教授

会員各位へ 会費は下記あて御納入下さるようお願いいたします。

1. 会費納入先 京都市左京区吉田本町 京都大学経済学部内
京 都 大 学 経 済 学 会
振替口座01090-6-17219番

1. 会費年額 10,000円(前納)

1. 会員各位の現住所、氏名、卒業年次、就職先を学会まで御通知下さい。

※ 会員外の雑誌購入は有斐閣へお申込み下さい。

平成15年9月25日印刷
平成15年10月1日発行

編 集 兼
発 行 人

京 都 大 学 経 済 学 会

印 刷 所

内 外 印 刷 株 式 会 社
京都市南区吉祥院池田南町13

発 行 所

京 都 大 学 経 済 学 会
606-8501 京 都 市 左 京 区 吉 田 本 町
振替口座01090-6-17219番

発 売 所

株式会社 有 斐 閣
101-0051 東京都千代田区神田神保町2-17
京都支店 606-8225 左京区田中門前町44

CONTENTS

Memorial Address

The Portrait and Brief Biography of the
Late Emeritus Professor Dr. Toshihiko Hirai

Achievements of American Indian Studies of the
East Part of North-America and Engels' 'Origin' (1) *Hiroshi OHNISHI*

Introduction and Development of Technology at
Tokyo Electric in the Inter-War Period..... *Shigehiro NISHIMURA*

Financing and Corporate Investment
—Based on Kalecki's Investment Theory—..... *Li Hong GUO*

Corporate Governance in Korea
—A Case Study of the LG Group— *Hyuck-Ki KWON*

Granger Causality Test between Financial Factor
and Corporate Investment *Suk Won HYUN*

To the Memory of the Late Emeritus *Toshihiko HOZUMI*
Professor, Toshihiko Hirai *Akihito KAKIMOTO*
..... *Hideo TANAKA*

Published

by

KYOTO DAIGAKU KEIZAIGAKU-KAI

(KYOTO UNIVERSITY ECONOMIC SOCIETY)